



大水槽を悠々とおよぐジンベイザメに圧倒される美ら海水族館

# 沖繩美ら海水族館で一日過ごす ジンベエザメの迫力

世界最大のサカナといえば、全長十数メートルにもなるジンベエザメだ。その大きさのゆえ、英語では「whale shark」、すなわちクジラザメと呼ばれるジンベエザメを、世界で唯一、複数飼育している水族館がある。(編集部)

## 沖繩の海をモデルに

今日は一日、沖繩美ら海水族館で過ごすことにする。ここには約740種、約2万1000点もの「水族」が飼育されている。シーズンオフの月曜日だが、朝9時30分の開館から閉館時間まで、ジンベエザメへの給餌解説や水族館の裏側がのぞける「黒潮探検」など、盛りだくさんのメニューが用意されている。まる一日いても足りない。

沖繩美ら海水族館は2002年に開館したばかりの新しい水族館だ。もともとは沖繩の本土復帰から3年後の1975年に開かれた海洋博覧会で日本政府が出展した海洋生物園が発原点で、それから27年、老朽化した施設を建て替え、あらたに開発したのが沖繩美ら海水族館である。開館401日で入館者数300万人に達し、日本で最も入館者数の多い水族館だ。

駐車場から水族館の入り口まで、ゆるやかな坂を下る。正面に伊江島が見える。青い海。ジンベエザメの大きなオブジェが見えれば、そこが入り口だ。

まず出てくるのが「イノーの生き物たち」の水槽。イノーとは、サンゴ礁から島にかけての波静かな内海のこと。引き潮になると外縁のサンゴ礁が頭を出して内側が池になる、あの「エメラルドグリーン」だ。ここは解説員が常駐していて、イノーの生き物たちに触ることができる。

## 特集

この水族館がすごい!

「こんな水槽があればいいのに、と思ってきた欲求がきつちりと満たされた感覚。」

「水量では7500トンと、アメリカのデイズニーワールドの2万2000トンに次ぐ世界第二位ですが、タテ8・2メートル、幅22・5メートルのアクリル製の窓は世界一の大きさです」

喜納さんによれば、ギネスブックにも世界一として記されているという。確かに、大きい。筆者の持つカメラでは一番遠くに下がっても正面からでは全景を撮影できない。巨大な水圧に耐えるアクリル製の窓は60センチメートルもの厚さがある。

ここにはジンベエザメが3尾、オニイトマキエイが4尾飼育されている。それぞれ長期飼育は世界一で、もつとも大きなジンベエザメ(「ジンタ」と呼ばれている)は今年で飼育開始から10年目になるといふ。飼育を担当する照屋秀司さんに話を聞く。

「ジンベエザメの複数飼育が可能になったのは、やはり大水槽の存在と、取水している海水の質の良さという環境条件が大きいですね」

しかし10年もの長期飼育は世界に例がないだけに、毎日が未踏の世界で、緊張の連続だといふ。

「朝、水槽をのぞく時は緊張しますよ。治療は困難ですし、大事にいたる前に対処しなければいけませんから、少しの異常も見逃せません。やはり体調を知る大きな指標は食欲です。サメは大きな体

## ジンベエザメの繁殖をめざす

のわりに少食で、ジンベエも3トンの体で25キログラムの餌しか食べないので、そのエサを旺盛に食べるか、ゆつくりと食べるか、注意して観察します」

そのエサの種類や量、質なども、どこかにテキストがあるわけでもなく、模索しながら作り上げてきた。すぐに黒くなるオキアミ、つまり防腐剤の添加されていないオキアミが必要なのだと業者に理解してもらおうのも大変だったという。

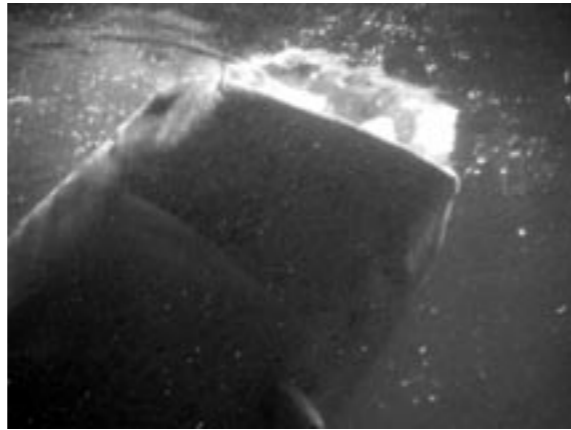
「自分が食べられるものを持ってきてくれ、といつも言っています」

ジンベエザメの生体はほとんどわかっていない。寿命もわからないし、卵生ではなく胎生だということがわかったのもつい最近のことだ。まだまだ未知の生物なのである。

「やはり目標は繁殖ですね。繁殖できるということは、彼らにとってこの水槽が、少なくとも最低限の生活環境を満たしているということの証明にもなりますし、彼らがいかに生まれ、育っていくのかを知るために非常に重要です」

もしジンベエザメの繁殖が成功したなら、水族館の世界では最大のニュースとなる。照屋さんの話を聞きながら、子どもジンベエの泳ぐ大水槽を想像する。水槽など環境は整っているのに、今は長期飼育に挑みながら、彼らが成体まで育つのを待っているという。

ジンベエザメに比べると、やはり世界



ジンベイザメの給餌。一回に1000リットルもの海水も一緒に飲み込み、エサだけ濾して食べる



メガネモチノウオ。頭がコブのようになっており、肖像画でナポレオンがかぶっている帽子に似ていることからナポレオンフィッシュと呼ばれる

「この水族館は沖繩の近海をモデルにしている、展示も入り口から順番にイノー、サンゴ礁、黒潮が流れる外洋の海そして深海へと、少しずつ深くなっていく状態を再現しています。展示されているサカナたちも、基本的に沖繩の近海で採集されたものです」

そう語るのは広報係の喜納政国さん。この水族館のユニークな点の一つに説明板がある。和名・学名・英語名とともに沖繩名と中国名が記されているのだ。たとえばオオテンジクザメは沖繩名で「タコクワヤー」(タコ喰い屋)、中国名で「鬚鯨」、メガネモチノウオ(ナポレオンフィッシュ)は沖繩名で「ヒロサー」、中国名では「曲紋唇魚」。これを見ているだけでも面白い。

喜納さんの言葉の通り、イノーの次に出てくるのが、天然の光を採り入れた明るいサンゴ礁と熱帯魚の水槽だ。ここでは水族館の前の海から一時間に3000トンの海水を取水しており、海水温も自然のサイクルのままで、この6月には外海と時を同じくして、水槽のなかでサンゴの産卵が見られたという。沖繩美ら海水族館ならではの出来事だろう。

## 世界一の窓をほこる大水槽

地下に進んでいって、ついにジンベエザメやマンタ(オニイトマキエイ)の泳ぐ「黒潮の海」の大水槽が目に入った瞬間の気持ちは、驚くとか、感激する、という気持ちとも違う。溜飲が下がる、と